オープンカレッジ

情報を選択する

技術進化と人間の判断力

名古屋市立大学大学院
経済学研究科教授
山口　明日香

飲食店や電車内、スーパー、病院の待合、歩道など、至るところでスマートフォンをのぞき込む人の姿を目にする。情報の収集・発信・交換が、場所や時間を問わず行われている。また21世紀の「情報化社会」では、人工知能（AI）の進歩も著しく、情報を瞬時に収集した上、それを基に作文もしてくれる。

筆者が専門とする歴史学の世界でも、史料のデジタル化が進み、キーワードを入力すれば、アナログでは絶対に辿り着けなかったと思われる史料や情報を収集することができるようになった。

歴史上、こうした通信環境の革命的な変化は、19世紀半ばにもあった。「交通・通信革命」の時代の始まりである。著名な歴史家・ダニエル・R・ヘッドリックによれば、帆船によって1830年まで約2年かかっていたイギリスーインド間の通信は、電信によって5時間もかからなくなった。通信速度がいかに速くなったかがわかる。

明治を迎えた日本では、直ちに電信が導入され、国家的事業として建設が進められた。電話はそれから約20年後に導入された。20世紀に入ると無線通信の開発も加速し、今からちょうど100年前の1925年には放送無線電話（ラジオ）が開始された。

こうした電気通信の普及は、当時の人々の生活や産業・企業の活動にも変化を及ぼした。以下は筆者がこれまでに調べた、漁業無線通信という限られた事例ではあるが、情報がどのように生み出され利用されていたかを教えてくれる。

第2次世界大戦前の日本では、蒸気機関・発動機や無線、冷蔵冷凍技術を活用して遠洋漁業が発展した。その代表的漁業であったカツオ釣漁業では、各府県の水産試験場や水産指導船および漁業組合が、政府の許可を得て無線局を設置し、漁獲の状況、漁船の入港状況、魚価、気象などを、漁船に向けて放送していた。放送材料は、水産試験場などが自ら調査・収集した情報のほか、無線機を搭載した漁船からもたらされる情報も含まれていた。そして、こうした情報を、無線機より安価なラジオを使って聴取する漁船も多かった。

しかし、良好な漁獲状況が放送されると、瞬く間に数十隻もの船が漁場に集まり、漁獲は困難な状況になった。そのため漁船は、他の漁船が集まってこないように、事実とは反対の内容を無線局に報告することがあった。したがって、放送には偽の情報が含まれている可能性があり、正しい情報を選びとることは容易ではなかった。

技術進化によって、情報収集の利便性は上昇し続けてきたし、情報量は格段に増加した。しかし、誤った情報が入り混じる環境は変わっていない。意図的であるにせよないにせよ、情報には誤ったものが含まれている可能性があり、情報を選び取ることには慎重でなければならない。今のところ、情報の真偽を判断し選び取る力は人間に求められている。その力は、今後いっそう必要となるだろう。遅ればせながら初めてChatGPTを利用し、それを痛感した今夏である。

やまぐち・あすか　日本経済史。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了、博士（経済学）。1979年生まれ